藤田浩子の 少し昔のこと〈91〉

人間らしい子育て

赤ちゃんのときにしっかり誰か（人間）の膝を指定席にしてこなくて「1 人で」座らされ、移動の時も「1 人で」座り、オシッコをするときも誰か（人間）に抱かれてする経験をもたずに「1 人で」おむつにしてきた、昼間も「1 人で」画面を見て過ごし、寝るときも誰か（人間）の声でおはなしを聞いたり、本を読んでもらったり、歌ってもらったりすることもなく、誰か（人間）に添い寝してもらったりもせず、機械の画面を見ながら「1 人で」眠る、ここ 30 年ぐらいの間にそういう生活がどんどん広まってきたように思います。

高度成長期に、家庭の中の仕事はつぎつぎ機械化されました。洗濯も機械がしてくれます。掃除も機械がしてくれます。ご飯も機械が炊いてくれます。でも、まさか子育てまでは機械化されないだろうと、私は思っていました。ところが今や子育ても、便利用品に囲まれて、人間の手をはなれつつあります。

私がこんなことを言うと「いま、また昔の子育てをしろと言うのですか」と言われることがあります。いいえ、そうではありません。今は今の便利用品に助けられて子育てをすればいいと思います。使うのは人間です。それでも（それだからこそ）「ヒトは人に育てられないと人になれない」ということを肝に銘じて、便利用品に任せきりにせず育てましょう、と言いたいのです。昔はやむを得ずくっつけて育てたかもしれませんが、今は選ぶこともできる世の中になりました。ただ選び間違えると、子どもは安心の場がないまま、人と人との関わり方がうまく身につかなかったり、自分の依って立つ場所が見つからなかったり、言いたいことがうまく言えなくて、自分の気持ちを上手に伝えられなかったり、自分の思い通りにならないと癇癪を起したり、「べったり度」の足りないお子さんが増えてきたような気がするのです。

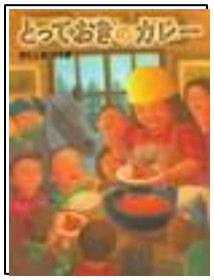
リレー連載 ＜224＞

わたしの大好きな絵本

四方由紀子

図書館で、たまたま表紙に惹かれて手にとった一冊。絵を見て「この作家さん、絶対山をよく知っている人だ！」と感じました。

私は山が好きなので、山が舞台になっている絵本を何冊も読んできました。それでも、こんなにリアルな雲海やランプ、さりげなくおいてある無線、背負子、天気予報の黒板、山小屋のおじさんにありがちなバンダナ姿、生き生きと描かれたカモシカやふくろう、モモンガ…山をよく知らないと描けません。



ハイキングで山小屋を訪れた子ども達に、おじさんは大好きなカレーをふるまいながら、珍客の話をします。

『とっておきのカレー』
作・絵…きたじまごうき
絵本塾出版

カレーを食べたカモシカが、お礼に持ってきたのはサルナシやヤマブドウ。それを使ったカレーを食べに来たのはふくろう。ふくろうがお礼に持ってきたのはヘビやカエル。それを使ったカレーを食べに来たのは雪男。雪男がお礼に持ってきたのは恐竜の骨。そしてその恐竜の骨で出汁をとったカレーを食べに来たのは…！子ども達も釘付けの展開です。最後は、裏表紙まで見逃さずに読んで貰いたい絵本です。

作者の北島剛毅さんは、長野県の山小屋で働いていたそうで、八ヶ岳のあの山小屋かなぁと予想できます。柏市在住との事で親しみがわきます。

子育てをしていると、つい自分の好きな事を忘れてしまいがちです。この本は子ども達の為というより、私が大好きな山の世界に浸れる絵本です。